**無門会の皆さんへ、「新型コロナの授業で何を学ばせるのか」20200815手島利夫**

・病気の恐ろしさ　・病気の特質　・世界的な広がり　・医療者の困難　・予

防対策　・自分たちにできること・・・

　皆さんは、新型コロナの授業で何を教え、何に気づかせようとしているので

しょうか。それが明確でないと、学習者の目をつむらせて象を撫でまわさせて

いるようなものです。尻尾をさわっただけで全体が分かったように思わせるよ

うな学習では、ものごとの真実に向き合い解決していく力は育ちません。

困難な問題が多発し、そのどれ一つとっても、世界の持続性を脅かすような

厳しい時代に生きる子どもたちに、問題解決能力を育むという視点から、私は

授業を構想してみました。つまり、

①　新型コロナ感染症の拡大は、患者数や死者数の拡大だけでなく、世界全体

に様々な影響を与えている。

②　感染拡大によっておこった問題は、互いに関連し合っている。

③　感染拡大によっておこった問題は、いくつかにまとめることができる。

④　様々な問題は、ＳＤＧｓの視点をもって見ていくことによって、問題が一

層明確になりやすい。

⑤　それぞれの視点において、「だれがだれと、どのような取り組みを進め、そ

れぞれの問題をどのように克服しつつあるのか。そこにどんな課題が残っ

ているのか。」

といった事実に基づいた学びを進めてほしいのです。そして、この学びは、

教科等の中だけでは解決できないような広がりをもつことになると思います。

そして、教科を越えて学び進めた経験が、他の問題の時でも同様の見方を働

かせ、大きな立場から問題の本質に迫れる子どもを育てると考えます。

　つまり新型コロナの問題は、「教科等横断的な学び」の好事例になるのです。

　では、プレゼンをざっとご覧いただきましょう。

<https://www.esd-tejima.com/newpage6.html>

[◆　2020年8月14日 【新型コロナ授業用プレゼン（無門会の先生方用にアップ）】](https://www.esd-tejima.com/10-74.pptx)

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

授業用プレゼンでは、問題の入り口までを案内してきました。この先は、

⑥　それぞれ子どもが、ウェブ図のどの部分に強い興味や関心、あるいは問題

意識をもったか、自分の名前を書いたシール(複数枚でも可)をウェブ図上に

貼りに行く作業をさせます。

⑦　そして、同じところにシールを貼り合った者同士で仲間を組み、協力し合

って学びを進めます。

⑧　その後に、まとめたものを使って中間発表会や、全体発表会（可能ならば

ワールドカフェ方式、あるいは縁日の屋台方式）等を使って共有されるとい

う進め方になります。

ではなぜ、このような教科横断的な学習が必要なのでしょうか。私たちの世

界を持続不可能な状況に追い込むような困難な問題、例えば地球温暖化を例に

考えてみましょう。

地球の温暖化はＣＯ２排出量の増加によるＣＯ2濃度の上昇が主な原因と言

われています。でも理科や化学だけ学んでいても、温暖化を止めることはでき

ません。経済や産業の課題でもあります。また代替エネルギー開発の課題でも

ありますし、海洋も温暖化すれば異常気象の問題にも、あるいは感染症の拡大

にもつながっていきます。

このように国際化・情報化の進む世界では、一つの問題は様々な分野に広が

り、問題を解決するためには、問題を多様な視点から分析的に捉え、多様な英

知を集めた総合的な対策が求められるのが今の世界なのです。

今の世界、そしてこれからの世界では、問題にいち早く気づく問題発見能力

だけでなく、ＳＤＧｓの視点のように幅広い視野から分析し、思考し、必要な

情報を収集し、的確な判断に活用する能力や、多様な人々と協働するための表

現力や実践力の育成が求められています。

知識はもっているのに、人に言われるまで自ら動けないような人間は、認め

られない世界なのです。ですから、日常的な学習活動においても、具体的な事

実や問題点を書き出し、ウェブ図等の思考ツールを活用して学ぶべき課題を明

確化し、「教科等横断的に」調べ・まとめ・共有し・発信し、実践を相互に評価

し合うといった、「主体的・対話的で、自己の変容を伴う深い学び」のスタイル

がどうしても必要なのです。

学習指導要領改訂で示されているこの二つの理念が、各中学校の教育課程に

どのくらい浸透しているのだろうかと、北陸地方のある市の全ての中学校の教

育課程を調べてみました。すると、「主体的・対話的で深い学びに向けた授業改

善」の記述があった学校は５７％ありました。しかし教科等横断的な学びを作

る「カリキュラム・マネジメント」の記載は１７％しかありませんでした。

今の中学校は学習指導要領の全面実施前年なので、低いのかと思い、同じ市

内の全小学校でも同様に調べてみましたが、２８％と８％、という驚くほど低

い数値でした。でも東京都内のある市の小学校では、カリキュラム・マネジメ

ントについての記述は、なんと、１．４％しか書かれていませんでした。

あれだけ「カリ・マネだ～！」と騒がれていたのに、取り組む意味や魅力が

ほとんど伝わっていないということであり、来年度になったからと言って教育

課程への記述が急増することもなさそうです。では、本当に意味のないものな

のでしょうか。

カリキュラム・マネジメントは「各学校においては、児童・生徒や学校、地

域の実態を適切に把握し、教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教

科等横断的な視点で組み立てていくこと、教育課程の実施状況を評価して改善

を図っていくこと、教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保すると

ともにその改善を図っていくことなどを通して、教育課程に基づき組織的かつ

計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくこと（以下「カリキュラム・

マネジメント」という。）に努めるものとする。（学習指導要領総則第１の４）

と示されています。

ですから、従来の学校教育では不十分であった「教育内容等を教科等横断的

な視点で組み立てることをきちんとやりなさい。そのことで、教育の目的や目

標を達成しなさい。」ということを示しているのです。（下線は筆者による）

つまり、今回の新型コロナで示したＳＤＧｓを踏まえた教育のように、特に

教科等横断的な視点に立ったカリキュラム・マネジメントは、「生きる力」を育

む教育課程編成の要であり、学校教育の再生をかけたチャレンジなのです。

どこかの学者さんが本で書いているような「人的あるいは物的な体制の確保

といった業務の効率化」などとは、全く次元の異なる重要な取り組みなので

す。確かにヒト・モノ・金といった体制がないと動かない面もありますが、そ

れだけでカリキュラムをマネジメントできるわけではなく、あくまでも「教育

内容構成上の重要課題」なのです。

ご自分で教科等横断的な学習を創り出し、その成果を学ぶ子どもの価値ある

姿として育てたことのない方が、断片的な文言だけで「業務の効率化」などと

くだらない解説をするから、だれも振り向かない無意味な文言にされてしまう

のです。

それでも教科等横断的な学びの重要性は、約20年前の学習指導要領改（1998

年公示、2002年から実施）の当時から、全く変わっていません。教科等横断的

に学びを作るのではないのです。問題が教科等を越えて広がって行っているの

です。だから、問題解決的な指導を考えると、教科等横断的にならざるを得な

いのです。私どもの先達、古川清行先生はこの辺りまで見越して「子どもの問

題意識を重視した学習過程」を指導してくださったのだと思います。

学習指導要領では、このような時代の課題に向き合い、学校教育の改革を進

めることを各地の教育委員会や校長・先生方に向けて強く求めているのです。